

序

格闘技の台頭によりプロレス人気は下火になった。
だが隆盛を極めた格闘技ブームも水泡の如く消えた。
ある者は海外へ夢を馳せ。
ある者はより小さな団体へ戦いの場を移し。
そしてある者は自らが衰退させたプロレスに活路を求めて。

戦後の街頭テレビにはじまり、その後はゴールデンタイムにTV放送とプロレス人気を誇った時代もあった。
しかし格闘技の台頭。そして団体の乱立…新しい団体が作られては消え…。
衰退と言われて久しいこの業界にある変革が起こった。
きっかけはある団体の親会社が変わった事。
メジャー団体と呼ばれる幾つかの団体の内のひとつだ。

明るい未来の見えぬ日本マット界を憂いたその団体が取った方法はとても簡単でありとても強引だった。

—買収—吸収—合併—

「団体が数多くあり、統括する団体も何も無いからいけないのだ」
図らずも世界一と呼ばれるアメリカの団体と同じ様な結果となったのだ。

自分達は相容れるぬと拒んだ者やインディーと呼ばれる小さな団体は未だ残る物の日本国内においてトップの座を手に入れた。

買収とは言ってもあくまでも自分達は統括団体の体を取り、名を「JWF (Japan Wrestling Federation) とした。

選手の入替えや合同興行等も行うが基本的には幾つかの団体に分けそれぞれが活動を行う形を取ったのだった。

—

僕の名前は青葉 誠、YAMATO所属のプロレスラーだ。
格好つけてプロレスラーと言ったけど入門したばかりでデビューも未だの練習生だけだ。
YAMATO…旧名新大和プロレス、かつてはメジャーと呼ばれたがJWF発足後現在の名称に変わってJWFのブランドの一つとなった。
厳しい入門テストに合格し、晴れてYAMATOで夢のスタートラインに立ったんだ。

小さい頃の夢はプロ野球選手だった。
小学校から地元のチームに入り、夢を抱いたまま中高と野球に青春を懸けた。
しかしその夢も圧倒的な現実の前に脆くも潰えた。
「現実なんてこんなもんさ、幾ら夢を見ても掴めるのはほんの一握りの恵まれた奴だけ。クソッタレだぜこんな世界。」
青春を費やした僕には何もなかった。
何もないままただ惰性で勉強をし惰性で進学し惰性で過ごした。

面白おかしく惰性で過ごす物足りないつまらない日々…そんな時にプロレスと出会った。
興味なんて全然なかった。ただ偶然足を止めた書店で、偶然目に付いたその雑誌の表紙に目を奪われた。

ぼこぼこに腫らした顔で。痛々しい傷痕の残る体で。
腰には輝くベルトを巻いて。
紙吹雪が舞う中、大勢の人に祝福されているその光景に。

そして何より充実感に溢れた顔に。

「かけーな…」

つい口から零れた。

何もない僕には十分過ぎる衝撃だった。

この張りのない惰性より、また輝く夢を見よう。

そして我武者羅にトレーニングを積んだ。

惰性で鈍った体を鍛え直した。

1度は入門テストに落ちたものの、2度目の挑戦で何とか合格する事ができた。

『この業界は何が起こるか分からないから大学はしっかり出ておいた方がいい』
テストの後にそう言われ、スタートラインに立つのは少しお預けとなったが卒業と同時に晴れて正式に入門となったのだ。

二

「お前もついにデビュー戦か。」

身長こそ同じ位だが僕より一回り程体のでかい男が言った。

「将来有望のレスリングエリート様とは違うんでね。」

嫌味ったらしく戯けて返した。

「ハハッそう言うなよ、同期じゃねえか。」

何かと気が合うこいつとは同期の仲でも特に中が良かった。

「まあこの赤城弘大様は世界大会にも出場してるレスリングエリート様で将来も有望だからな、デビューが早いのも仕方ないな。」

とふんぞり返って戯けてみせる。こういう男だ。

「んで、相手は？」

「ん、ああ横田だよ」

「デビュー戦同士かよ羨ましいな。俺なんて先輩相手だったからぼこぼこにされたんだぞ。」

顔に手を置いて大袈裟にリアクションを取ると

「まあ将来有望だから仕方ないか。」

こういう男だ。

僕、赤城、横田を含めて同期は5人いる。

この業界は大相撲からの流れを汲んでいるから付き人というシステムが存在する。

簡単に言えば特定の先輩を師匠としてその人に付いて身の回りの世話をしながら学んで行く事だ。

YAMATOでも昔はこの制度を取っていたけど数年前に廃止されている。

まあそもそもその制度自体ない団体も多いけど。

新人は試合の準備やセコンド等の雑務をこなしつつ自分達の練習をする。

そして遂にデビュー戦の日

デビュー戦といっても大きな舞台等ではなく普通の興行の普通の第一試合。

所謂前座だ。

入場口に繋がる通路で待機しながら気持ちを落ち着かせる。

緊張で気持ち悪い、今にも口から心臓が飛び出しそうだ。

「大丈夫だって、誰もお前目的でなんか来てないって。気にせずのびのびやれ。」

僕の後には試合を控える赤城が言った。

確かにさっきチラッと会場を見たが未だお客さんの入りはまばらだった。前座の試合なんてそんなもんさ。

「んまあレスリングエリートの俺様は大舞台にも慣れてるしデビュー戦も注目されてたけどな。」

つつこむ余裕もなかった。

「お、ほらもうすぐだぞ。」

赤城が言うや否や扉の向こうでアナウンスが鳴った。

緊張で何を言ってるのかは理解できない。

ただ自分の曲がかかると急かされる様に扉から出された。

頭の中は真っ白でよくわからないまま小走りでリングに向かった。

リングに上がっても全く落ち着かない。

「180センチ90キロオオ青葉あああまこおとおおお」

「本日がデビュー戦であります」

自分の名前がコールされた事に気づいて慌てて礼をした。

対角線上にいる横田もまた、名前がコールされても落ち着かない緊張した様子だ。

「ガンバレ」

どちらに向けられたものかもわからないが客席からはまばらながら拍手や声援が飛んでいる。

お互いレフェリーからボディチェックを受ける。

その光景をふわふわした感覚で見ている。

「レディーファイト」

カーンとゴングが鳴ってハッとした。

お互いリング中央に歩み寄りロックアップで試合が始まった。

三

横田と僕は身長で10センチ、体重は10キロ近くも差があった。

お互いに新人でまともに使える技も少ない、体格で勝る僕の優勢で試合は進んだ。

ゴツッ！

会場に鈍い音が響く

エルボーを受けてよろける横田。

しかしよろけながらもゴツゴツとエルボーを返す。

バチーンッ！

今度は逆水平チョップ

しかしそれにもバシッバシッと手数で対抗する横田。

お互い意地になり打撃の応酬が続く。

「パワーではこっちが勝ってるんだ、先に倒れるわけには行かない。」

そう思った刹那バンッと勢いよくリングに叩きつけられた。

何が起こったのか理解できずにふらふらと立ち上がると一瞬目の前が暗くなりまた同じ衝撃を受けた。

今度は理解できた。

ドロップキックだ。

理解は出来たものの今度は無理矢理起こされロープに振られる。

そして返ってきた所にカウンターのドロップキック。

体格で劣る横田が僕より優れている処、瞬発力。

普通は胸、身軽な選手で首筋や顔を狙うドロップキック。

瞬発力・跳躍力に優れる横田は僕の顔程度なら助走もなく楽々とキメてみせた。

ボディスラム…は堪えたもののエルボーの連打からまたドロップキックを食らってしまう。

仰向けに倒れた僕の両足を抱えるように掴むと、そのままステップオーバーしてひっくり返し腰を落とす。

リバースポストンクラブ、逆エビ固めだ。

ギリギリと仰け反るように絞り上げられて腰から背中に激痛が走る。

「グハッ！」

声が漏れる。

「ギブアップ?!」

レフェリーが問いかける。

ロープは…遠い、ここまでか…

「ギブアップ」

「ノー！まだやれる！」

「!？」

遮る様にレフェリーが言った、プロの世界は厳しいぜ。

こうなったら何とかロープに逃げるしかない。

「うあああああ！」

プッシュアップの容量で上半身を持ち上げると懇親の力を籠めて腕の力のみでロープを目指す。

「ブレイク！横田ブレイクだ！」

なんとかロープに逃げる事が出来た、だが相手も休ませてはくれない。頭を掴んで無理矢理起こすとエルボーの連打からロープの反動をつけてゴツンッ！

逆にカウンターのエルボーが決まった。

そのままボディスラムで思い切り叩きつけるとお返しとばかりに逆エビ固めで締め上げる。

ロープに逃げようと粘る横田を強引にリングの中央に引きずり戻す。

そのまま片方の足を両手で抱える逆片エビ固めに移行しより一層力を籠めた。

バンバンバン

カンカン！

ゴングが鳴ってハッとする。

「タップだ青葉！」

「8分37秒青葉誠選手の勝ち」

勝ち名乗りを受け喜びを爆発させた。

四

デビュー戦での勝利から数ヶ月、あれから僕は勝ったり負けたり負けたりを繰り返している。

次の試合では横田にキッチリとリベンジされ、赤城には当然ぼこぼこにされた。

そんな僕にも初めての大会が近づいている。

合同興行である。

試合数も限られていて普段なら僕のような新人に出番はない。

しかし今回は参加団体の新人同士でタッグマッチをする事になり、YAMATOからは僕が選ばれたのだった。

「俺様は他団体の選手とシングルマッチだけだな。かっつ将来有望だと辛いぜ。」

なんて赤城は言っていたが同期の中では僕も見所があるって事なのか？

そして試合当日。

「あー吐きそう…」

緊張がヤバイ、胃が痛い。

「おいおいいい加減慣れろよ。」

と言いつつ背中を叩かれる。

「いやだってお前こんなでかい会場…」

「この間うちだけでここ使っただろうが。」

「いや俺あの時試合なかったし。」

「ここでも将来有望な俺様との差が。」

ハッとした表情で口元に手をやり戯ける。正直こいつのこういうところには助かっている。

「うるせえよ。それにさ、ミックスドマッチって初めてなんだよ。」

「あー俺もないな。でも今日のルールはミックスドマッチでも特に普段通りだろ？」

「うんまあ男子は女子に攻撃しちゃダメとかそういうの無いから普段通りっちゃそうだけどさ。」

「じゃあ普段通りやるだけじゃねえか。俺様のためにしっかり会場を暖めて来なさい前座君。」

「そうですよー大事な第一試合なんですから。」

後ろから突然女の声が乱入してきた。

振り返るとコスチュームに身を包んだ女の子が佇んでいた。

まだ10代だろうか、幼さの残る顔とは対照的に肉付きの良い体。

黒髪で額には鉢巻を巻いていた。

「それに相手のチームの女子の朱音ちゃんって下手なその辺の男子レスラーなんかより全然強いですからね。」

と彼女は続ける。

「あ、ごめんなさい。私今日のパートナーの桃園ユイです。よろしくね青葉君。」

とどいつつニコっと笑った。可愛い。

「こちらこそよろしく。ユイちゃん。」

バンッとすぐ後ろの壁に手を突いて凄い形相で睨まれる。

「年齢は私の方が下でもデビュー数ヶ月の君じゃあ私の方が断然先輩なんですからね？
口の利き方に気をつけてください。」

「す、すいません。」

「わかればいいんですよ。」

ニコッと笑う。笑顔はこんなに可愛いのに…。

「まあ私もこういう大きい舞台は初めてなんですけどね。あ、そろそろ時間ですよ。」

そうこうしてるうちにアナウンスが入り入場曲が流れる。

こんなでかい舞台で僕の入場曲が流れるなんて夢にも思わなかった。

終

「っていう感じの話を書きたいんだけどどうだろうか？」

「僕たちの闘いはこれからだ！〇〇先生の次回作にご期待ください。だな。」

「打ち切られてんじゃん！この後一旦第一部完にして桃園ユイを主人公にした第二部、
そしてマスクマンになる青葉の第三部って構想もあるのに！」

「最初っから女の子の方がいいかもな、今の時代。」

終わらないあとがき

はいと言うわけで大遅刻ですよ。

突然思い立って最終日に書き始めるというどうしようもないやつです。

正直内容的にもアレだしこれはやっていいのか？って感じのことも書いてますしね。

ぶっちゃけ某氏に言われてちょっとプロレスの話が書きたくなっただけなんでね。

うんこれどうなんだろ？

書ききれなかったアレやコレもあるしね。

作中のエピソードに関しては所々モデルがあったりなかったりです。

タイトル及び入場曲はTHE BLUE HEARTSの終わらない歌より引用。